

## 感情とイメージ

文教大学名誉教授

水島恵一（みずしま けいいち）

心理的・人間理解におけるイメージの重要さは、自己表現においても、イメージが大きな役割を果たすことに対応している。心的体験はイメージとして、その全体的な生きた姿を投影しやすい。

イメージの重要さは、例えば、いまの自分の心が「澄んだ川のように」だとか「濁った川のように」だというような比喩的表現のレベルで、すでに明らかである。また例えば、心のありようによって「大海の孤島に一人いるような寂しさ」「踊りはねたいような喜び」というような比喩やイメージも語られる。同じ「海」でも「静かな海」は平和や安定などを象徴するし、逆に「波風のたつた海辺」は不安その他情動の揺れを象徴する。荒波はさらに「怒涛のような」怒りや激しい不安などをあらわすであろう。広く深い海原はそれなりの広く深い心性を表現するし、海岸の光景は岸辺の砂浜や岬などの印象と相まって、さまざまな具体的なニュアンスの心性を表現する。これらは一義的・概念的には語り尽くせない感情のニュアンスをあらわすものである。こうしたことは、絵画や詩歌などによるイメージ表現においても同様である。

臨床心理学的アプローチにおいて、イメージが果たす役割も、こうした点にある。イメージ・芸術療法も、この点に注目したものと見える。クライアントが自己ないし心的世界を実感的に洞察する過程は、まさに自己診断の過程であると同時に治療的過程でもある。芸術療法においても、閉眼イメージ面接においても、イメージを媒介にしながら、クライアントと治療者は治療関係を発展させ、そこにおいてクライアントの自己理解も展開していくと考えられる。

また、イメージ・芸術療法のみならず、健常者を対象としたカウンセリング、グループアプローチ、その他日常の会話をも、イメージは心理的に豊かなものにしてくれるものである。

このようにイメージは、心の全体性、個別性、ニュアンス、変化等々をとらえることを可能にする。人間性の部分的理解、一義的に概念化された理解、固定的理解等々によってはとらえきれない「ナマ」の実感を与え、そこにおいて、人間の心的世界も変化・発展するのだといってよいであろう。



### Profile — 水島恵一

1928年、東京生まれ。東京大学法学部卒業。同大学大学院人文科学研究科心理学専攻修了。文学博士。横浜少年鑑別所技官、東京都児童相談所技師、東京大学講師、文教大学人間科学部教授、同学長を歴任。専門は臨床心理学、人間性心理学。主な著書は『人間性心理学大系（全10巻＋別冊2巻）』（単著、大日本図書）、『イメージ心理学（全4巻）』（共編、誠信書房）、『新版カウンセリングを学ぶ』（共著、有斐閣）、『臨床心理学の基礎知識』（共編、有斐閣）、『人間の可能性と限界』（単著、大日本図書）、『パーソナリティ』（単著、有斐閣）など多数。